

2014年6月

奨学生レポート

下 英恵

今年の秋より University of Cambridge Department of Biochemistry PhD Program に進学することになりました, 下英恵です.

このレポートでは, 学位留学を決意してから, 合格までの道のりの経験をご報告します.

1. 学位留学のきっかけ

私が学位留学を思いだしたのは, 学部 3 年生の夏にスコットランドで行われた Systems Biology の国際学会に参加した事がきっかけでした. 当初は, 研究を初めてから大して時間が経っておらず, 大学院進学も真剣に考えていませんでした. しかし, 初めてのポスター発表を行い, 国籍・年齢・立場問わず, 様々な人と研究について話し合える楽しさを知った事, また製薬企業で自分が研究しているような代謝系のシミュレーションを実際臨床へと応用している研究者と話をできた事が, 自分の意識を変えました. その後, 海外の製薬企業・バイオベンチャーなどで最先端の研究をするためにはどうすれば良いのか, 色々と調べ, 海外の大学院の博士課程プログラムに進学することを決意しました.

2. 準備・出願

私は海外の研究室にコネクションがなかったため, 修士 2 年の春に, 自分の知っている大学院の生命科学研究科のホームページなどを調べて, 興味のある研究室の論文を読んで, 先生に CV と Statement of Purpose (SOP) を送る日々繰り返していました. 私の場合, これまでの研究テーマとは少し異なる分野へ進むことを考えていたため, 論文を読む際の専門用語の理解や, 研究プロポーザルを考えるのに苦労しました. しかし SOP では, 自分のこれまで培ってきたスキルをどう他の分野で生かせるかを一生懸命アピールしました. そして, 結果的に 2 つの研究室に, 面接も兼ねて夏の期間中, 研究室訪問をさせていただくことになりました.

訪問先では自分の修士の研究のプレゼンをし, ラボメンバー全員と一対一で話す時間なども設けられました. 訪問前は ETH Zurich の研究室に想いは固まっていたのですが, 実際訪れてみると University of Cambridge の Gurdon Institute の雰囲気魅了され, 改めて実際研究室に行ってみることの大切さを実感しました. 帰国後は, 訪問時に話し合った研究計画を固め, 奨学金の申請に取り組みました. 推薦状は 2 通, 大学時代からの指導教官と, 修士より大学院研修生

として所属していた理化学研究所生命システム研究センターの研究室のチームリーダーをお願いしました。11 月には奨学金の結果発表があり、無事船井情報科学振興財団より内定をいただくことができました。

年末年始は修士論文等の卒業準備や他の海外派遣プログラムなどあり、本当に忙しかったのを覚えています。結局 University of Cambridge には 12 月中旬に出願し、2 月に Conditional Offer を得て、6 月中旬に Confirmation of Admission をいただくことができました。イギリスの大学院は学費や生活費が高額で、且つ Research assistant 制度などもあまり存在しないため、奨学金を取得できなければ入学もかなり難しい状況でした。

3. 振り返ってみて

留学を決意してから、合格を得るまでは非常に長い期間でしたが、目標に向かうための通過点と考えることによって、想定していた程準備も大変でないように感じました。本当に行なって良かったと感じたことは、やはり研究室訪問と、早いうちからの教授へのコンタクトや研究活動でした。最終的に合格に一番貢献したのは余裕のある準備と、周りからの情報収集だったと思います。

これからですが、9 月末より渡英し、10 月の頭より、授業や新しい研究室での研究活動を開始する予定です。専攻は生化学になりますが、研究室自体は、2012 年に山中先生と一緒にノーベル医学生理学賞を受賞したジョン・ガードン博士などの研究室がある、発生生物学分野では有名な Wellcome Trust/Cancer Research UK Gurdon Institute の中にあります。ここでは細胞の形や動きの基盤となる細胞骨格系が発生段階において、どのようにできあがるのかの機構を研究していきます。ケンブリッジ大学は、ワトソン・クリックなどによる DNA の二重らせん構造の発見や、ホジキン・ハックスレーの神経軸索モデルをはじめとする、現代の生物学の基礎となっているような研究が行なわれたところということもあり、特に生命科学を学ぶ人にとっては、大変魅力的なところだと思います。

最後になりますが、私が留学を決断するにあたり、大学時代の研究室の先輩・先生方には大変お世話になりました。学部時代に国際学会や国際学術論文誌論文執筆に挑戦させていただけたからこそ、私の将来選択肢はここまでに広がったと思います。また、留学を決意してからは、既にご留学されている先輩方にたくさん相談にのっていただいたり、志望理由書などを添削していただいたりしてもらい、本当に感謝しております。今後恩返しをできるように、精一杯研究を頑張っていきます。